仁王様と橋

岡村　めぐ美

絵　すえふじ　まき

夜が更け、家々の明かりが消え始めると、川の向こうはいっそう賑やかになる。飲み屋街である新開には、人々の楽しそうな声が満ち満ちていた。

ちょうどその日、新開ではまつりが催されており、いつもにまして明るい人々の声や鼓の音が、西國寺の門にまで届いていた。

「楽しそうじゃのう」

「おお、楽しそうじゃのう」

華やかなまつりの音に目をさまし、連れ立って門を抜け出したふたりの仁王様。軽々と川をまたいで新開へと遊びにでた。地をも揺るがす大きな足音と豪快な笑い声で、新開の人々は仁王様たちが門を出たことを知っていた。仁王様たちがこうして遊びにくるのはいつものことで、慣れた人々はその大きな足に踏まれぬようにとうまいこと避けて歩いていく。

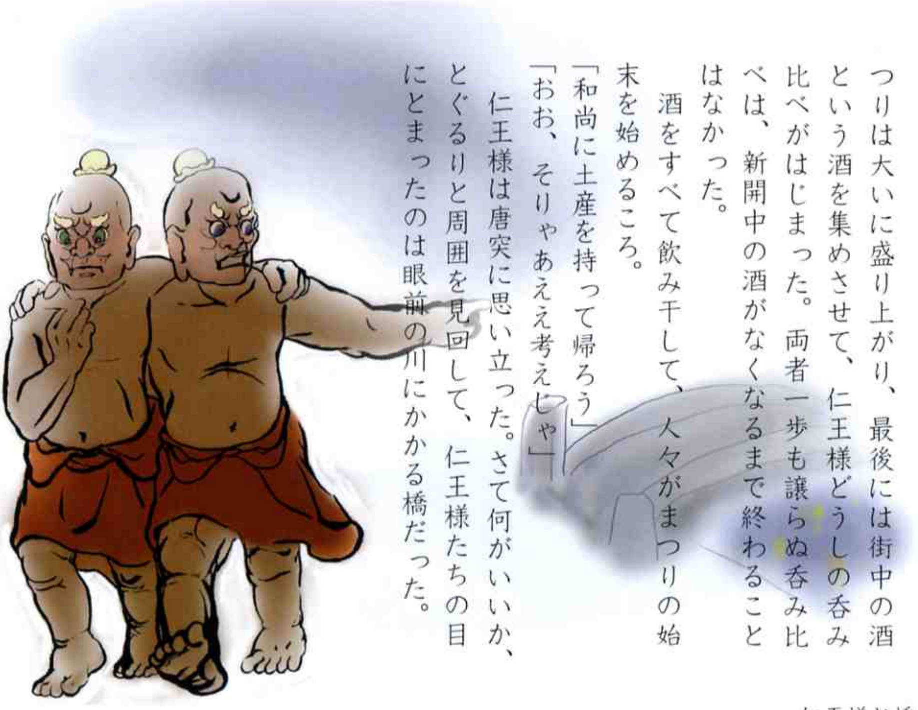
仁王様はそれぞれ杯を片手に、踊りの輪に加わったり、人々の奏でる音にあわせてうたったり。ともにいい気分で酔っ払っている。まつりは大いに盛り上がり、最後には街中の酒という酒を集めさせて、仁王様どうしの呑み比べがはじまった。両者一歩も譲らぬ呑み比べは、新開中の酒がなくなるまで終わることはなかった。

酒をすべて飲み干して、人々がまつりの始末を始めるころ。

「和尚に土産を持って帰ろう」

「おお、そりゃあええ考えじゃ」

仁王様は唐突に思い立った。さて何がいいか、とぐるりと周囲を見回して、仁王様たちの目にとまったのは眼前の川にかかる橋だった。



「ええもんがあった」
「おお、ええもんがあった」
そう頷きあうと、仁王様たちは橋に手を伸ばす。川をはさんで、両側から橋の根元をがっしりとつかみ、次の瞬間。

「いい土産じゃ、いい土産じゃ」
「おお、和尚も喜ぶじゃろうな」
「おお、喜ぶじゃろう」
豪快に橋を担ぎ上げた仁王様たちは、上機嫌で寺へと帰っていった。仁王様たちの背が見えなくなったころ、新開の人々はやっと我にかえって驚きの声を上げたのだった。

夜も明けきらぬ寅三つ時。仁王様たちは西國寺の門の前で目をさました。大きな体をのそりと起こした仁王様たちの目に入ったのは、どこかで見たことのある石造りの橋。どうやら新開に渡るために設けられていたもののようだが、はて、なぜこんなものが門の前にあるのか。仁王様はふたりとも、昨晩のことを何も覚えていない。

「おい、こりゃあなんじゃあ」
「知らんぞ、わしゃあ知らん」

まさか自分たちで持ってきてしまったのだろうか、だとしたらえらいことだ。そう考えた仁王様たちは、ともにそそくさと門の中へ戻って何も知らないふりをすることに決めた。

さて困ったのは、翌朝の和尚さま。仁王様に挨拶を、と門まで出てみると、昨日の晩にはなかった何かが置いてある。よく見るとそれは、石造りのちいさな橋。和尚さまは驚きのあまり仁王様への挨拶すら忘れて立ち尽くしてしまったのだった。

そして、どうにも気まずかった仁王様たちは結局その橋をかえしに行くことができず、それ以来、西國寺の仁王門の近くにはその橋が置いたままになっているのである。